

国立国語研究所学術情報リポジトリ

人間関係の日本語史（日本語学会2010年春季大会シンポジウム報告）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/3297

日本語学会 2010 年度春季大会シンポジウム報告

日時 2010 年 5 月 29 日 (土) 14 時～17 時

場所 日本女子大学

〈A 会場〉人間関係の日本語史

パネリスト・小林 隆, 森山由紀子, 諸星美智直, 宇佐美まゆみ
司会・高山倫明

1. 本シンポジウムの趣旨

発話に際して、我々はつねに対者との関係を測り、姿勢や表情・しぐさのような非言語的なものから、待遇表現のような言語形式にいたるまで、適宜、注意深く選択している。そこに種々の興味深い地域差・位相差のあることが近年多く指摘されるようになり、科研の共同研究やシンポジウムでも取り上げられる機会が増えてきた。

共時的変種は通時的变化と表裏一体の関係にあり、ここに自ずと、人間関係の測り方をめぐる言語行動の歴史的変遷はどこまで辿れるかといった課題が浮上してくる。例えば敬語辞のように言語形式の上にその史の変遷が比較の見えやすいものもあれば、しぐさや声色のように、人間関係の取り方に直結するものでありながら、過去の資料からは推し量りにくいものもある、また、形式の変遷は見えても、その運用方法の変化までは容易には測れない、といった様々な問題がありそうである。たぶん、その道のエキスパートといえるような人はまだそう多くはないことだろう。一方で、どの分野からも、この問いに対する何らかのアプローチは可能なようにも思われる。

このシンポジウムでは、地理的視点からの言語行動の把握、時間軸に沿った対人的言語行動の対照、過去の一定の社会集団の言語行動の記述、といった各方面からのアプローチに、理論的枠組みとしてポライトネス理論を絡め、新たな研究分野の開拓を模索した。

(高山倫明・九州大学)

2. 発題内容

2.1 言語的発想法の歴史と方言の形成 (小林隆・東北大学)

「人間関係の日本語史」というテーマについて、「言語的発想法」という概念を提案することで考えてみた。「言語的発想法」とは、狭い意味での言葉の形や意味、あるいは文法と呼ばれるものを超えて、ものごとをどのように表現するかという、言語についてのそもそもの考え方のことを指す。言葉を操る規範や志向のようなものと言ってもよい。

このような言語的発想法の地域差について、表現法や言語行動など、言葉の運用的な側面について具体的現象を観察した結果、言語化、定型化、分析化、加工化、客観化、配慮化、演出化という7つの発想法を抽出することができた。そして、これらの言語的発想法は、地理的に見た場合、「近畿を中心とした西日本、および関東」で発現しやすく、「東西の周辺部、特に東北を中心とした東日本」では現れにくいことが明らかになった。

さらに、「社会と言語運用の関係モデル」を提示することで、言語的発想法を生み出す「言語環境」と「言語態度」を探り、さらにその背景にある「社会構造」の特徴についても考察した。すなわち、「社会構造」のあり方として、人的接触が活発であるとともに階層の流動性が高く、また、民主的な決定システムを備えていて話し合いが重視される社会は、「言語環境」の面でコミュニケーションの活性度が高く、かつ、「言語態度」の点で言語への依存性が強いという性質を発現させる。そして、それらの性質に呼応して、7つの言語的発想法が積極的に生み出されていく、と考えた。一方、これとは逆の社会構造や言語環境・言語態度をもつ社会は、それらの言語的発想法も現れて来にくいとみなした。したがって、言語的発想法に上記のような地域差が認められるとすれば、その背後には、そうした地域差を作り出す社会構造の地域差が存在しているということになる。おそらく、7つの言語的発想法が発現しやすい「近畿を中心とした西日本、および関東」と、発現しにくい「東西の周辺部、特に東北を中心とした東日本」という地域差は、弥生時代以降の人口密度や社会組織のあり方に影響を受けつつ、中世頃までには対立の基盤が形成されていた可能性が考えられる。ただし、そうした地域差が明確化するのに決定的な役割を果たしたのは、商工業の活発化とそれに伴う階層の流動化、あるいは交通の発達といった中世以降の社会構造の変化であったと思われる。そして、そうした変化の中心が近畿中央部であったことからすれば、中世には、7つの言語的発想法は、具体的な表現法や行動様式を伴って、中央から周囲に向けて盛んに発信されるという現象も起きていたはずである。そのような中央からの表現法や行動様式の伝播は、中央と同様の社会的変化をいち早く蒙り、中央と同様の発想法が強く発現してきた地域、すなわち、西日本と関東では、新しい発想法に具体的な姿を与えるものとして歓迎され、積極的に受容されたと考えられる。

2.2 対人的言語行動の史的対照研究（森山由紀子・同志社女子大学）

対人的言語行動史にも、共時的的研究と、通時的的研究とが考えられる。今回のパネリストである諸星氏に代表される緻密な共時的的研究は、すべての研究の基礎となるもので、共時的的研究によってもたらされる正しい文脈理解を欠いた通時的的研究は空疎なものとなりかねない。一方の通時的的研究は、対人的言語行動に関わる、ある「形式」の通時的変化を追う方法と、ある「場面」における言語行動の通時的変化を追う方法との二種に分けられる。対人的言語行動と言えば、「ありがとう」等の定型表現に着目しがちであるが、

実は、古代日本語において、こういった種類の定型表現はあまり活発ではない。しかし、当時、日本語話者が人間関係を円滑に進めるために言語を活用していなかったわけではなく、やはり、何らかの言語的方略を用いていたはずである。過去の日本語に存在したその方略を明らかにすることは、現代日本語における対人関係調整のための言語行動のルーツを探ることにつながり、また、地理的、文化的変種を理解する上でも重要な視点を提供する。ただし、文献に残された言語資料は、対人関係のために費やされた数々の言葉の断片に過ぎないということも看過できない。場面や機能に着目した、対人的言語行動の通時的研究というのは、残された資料をつなぎ合わせて、ある時代に共通して存在していたであろう共通項を見出し、現代語の「物の言い方」と対照させるという方法を取る必要がある。このような考え方にに基づき、場面を軸として対人的言語行動の歴史を考察した歴史語用論の立場からの二つのケーススタディーを紹介する。

一つ目は、定型表現の成立経緯に着目する方法である。現在、物を依頼する場合、目上相手には「頼む」ではなく、「願う」の動詞が用いられる。これは、19世紀に定着した言い方で、それ以前は「頼む」の語が用いられていた。ただし、「頼む」は、本来、人を「頼りにする」という意味を持つ語であり、それが、依頼場面において用いられるためには、「人ヲ〇〇ニツイテタノム」から「人ニ〇〇ヲタノム」という表現が派生していることが必要である。同時に、それが上向きの依頼に用いられるのは、相手への依存や信頼の表明が、依頼を円滑に進めるための方略として用いられていたことを示す。これは、現代日本語とは異なる方略である。

二つ目は、定型でない表現に着目する方法である。平安和文には、謝罪を表す定型表現がなかったことが指摘されているが、「謝罪」がなかったとは考えられない。定型表現のない時代の「謝罪」の在り方を考えるために、宇佐美(2001)の「ディスコースポライトネスの基本状態」という概念を導入する。平安時代の謝罪場面の発話を見て行くと、事情説明が頻繁に見られる。江戸時代の発話からは、ディスコースポライトネスの基本状態として、「言い訳」「申し訳」が要求されていたことがわかる。しかし現代では、過度の言い訳はマイナスに働く。つまり、事情を縷々説明することが求められる社会から、まず謝罪の意を表明することが求められる社会へという変化が認められるのではないか。

2.3 近世武家社会における言語行動 (諸星美智直・国学院大学)

「人間関係の日本語史」の文献による事例研究の一つとして、武家社会における言語行動について、資料から指摘できる範囲で類型の一端を検討した。近世期の言語行動を文献資料によって検討する際に、言語行動の概念規定の範疇にもよるが、検討しやすい資料としにくい資料があるようである。特に、言語行動については、近世文書・戯作とも、会話体の資料が調査に向いているのに対して、講義筆記など教養層の口語を反映す

る資料は一对多の場面で発話されたものが多く、言語行動の調査資料としては扱いにくいのではないかと考えられる。

公的場面における言語行動としては、(1)幕府儀礼における奏者番による「御祝儀」「御礼」「御機嫌伺」「披露」「御使先」などの口上（国立国会図書館蔵・信濃高遠藩主内藤家文書『江戸城諸役人勤向心得』など）は武家社会における荘重な場面における言語行動であり、各留に添付された末図によって殿中の畳目における位置、角度、序列を併せて確認出来る。(2)諸藩においても、土佐藩の御駈者初のように幕府儀礼に準じた口上が行われた事例がある（『帳内秘記』など）。(3)幕府巡見使や関所役人などが庶民に公的に接する場合にも「質問」や「命令」などの言語行動が認められるが、近世文書のうちの各種訴訟の吟味記録類に、吟味席における審問の際の人定質問や自白を促すための恫喝表現が見られ、言語行動の類型と捉えることができる。(4)幕臣・陪臣などの人間組織における言語行動としては、面徳齋不肖の洒落本『螺の世界』や水野為長の『よしの冊子』などからは、挨拶表現のほか、上司による横柄な表現や下僚による追従表現が見られる。

私的場面における言語行動としては、武家の家庭内や友人・知人同士での場面における表現も想定されるが、資料の制約から十分な検討がしがたいが、洒落本は武家客に限らず近世における言語行動の検討資料としては用例を集めやすい資料ジャンルではないかと思われる。しかも、遊里における言語行動をある程度類型化して捉えることができる。言語行動の先行研究でしばしば取り上げられてきた挨拶表現や謝罪表現のほかにも、(1)歓迎表現（遊里関係者）、(2)高慢・知ったかぶり表現（遊客）(3)ヨイシヨ・チヨチヨラ（遊里関係者）、(4)就寝の挨拶（遊里関係者・遊客）、(5)イザコザ（遊客）、(6)歓送表現（遊里関係者）などの多様な言語行動が認められる。

また、研究方法として、文献による用例の収集とともに古文書類では話者・聞手の位置を示す図面や、戯作類では本文の言語行動に対応する挿絵（挨拶の場面など）に見られる作法やしぐさも含めて言語行動を検討する必要性を指摘した。

2.4 人間関係とポライトネス（宇佐美まゆみ・東京外国語大学）

本発表では、今後、「人間関係の日本語史」なるものを、実際の言語資料に基づきながら解き明かしていく際に、過去から現在にわたる言語資料という実際のデータ群の隙間を埋めていくための一つの有効な理論的枠組みとして、B&Lのポライトネス理論と、それを発展させたディスコース・ポライトネス理論（宇佐美, 2002, 2003, 2008a等）の捉え方の一部を紹介した。その上で、ポライトネス理論研究と、現代、及び、過去の一定の社会集団における（非）言語行動の記述研究、その通時的研究、さらには、地域差をはじめとする（非）言語行動の共時的変種の記述研究は、有機的に協働していくことができるとし、その一つの可能性を提示した。発表の流れは、以下の通りである。

1 ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の基本概念と4つの側面の確認

- 2 「対人配慮行動」としてのポライトネスの普遍性と個別性の捉え方の確認
- 3 人間関係のあり方とポライトネス・ストラテジーのタイプの関係の紹介
- 4 対人コミュニケーション理論として構想・展開されている「ディスコース・ポライトネス理論」の基本概念の紹介
- 5 人間関係の日本語史の研究のための方法と解釈についての一つの示唆

ここでは、主に、5についてまとめる。B&Lは、人間関係における「力関係」を表すP値と「距離」を表すD値とによって評定される社会的関係は文化に特有であるとし、大きくは、P値が高く見積もられ、地位の差異化が強調されているネガティブ・ポライトネス文化か、逆に、P値が低く見積もられ、平等主義的な関係が強調されるポジティブ・ポライトネス文化に分かれるとした。さらには、P値、D値が、その社会の成員によってどのように捉えているかによって、3つのダイアッドタイプに分かれるとした(予稿集図2)。ダイアッドI~IIIの通時的変化については、日本語の言語使用を考えると、ダイアッドIを経て、ダイアッドIIに変化し、現在は、さらにダイアッドIIIへと変化しつつあるように見える。様々な言語の通時的研究による検証が望まれるところである。

次に、「ディスコース・ポライトネス理論」(宇佐美, 2002 他)と、その中の「基本状態」という概念が、「人間関係の日本語史研究」とどのように関係しているかについて、簡単にまとめておく。ディスコース・ポライトネス理論の枠組みで行う個々の実証研究の目的は、「基本状態」の一般化それ自体ではなく、当該データで同定した「基本状態」が、当該の社会集団の(非)言語行動のある種の「典型」であると想定することによって、特定の「有標行動」の「ポライトネス効果」をも、相対的に解釈していくということである。また、いくつかの社会集団における特定の(非)言語行動の「基本状態の違い」(例えば、地域差等)を明らかにしていくことは、「対人配慮行動のバリエーションの研究」にもなりうる。そのため、通時的研究・共時的研究の双方に適用できる。

このように、現代・過去の一定の社会集団における(非)言語行動の記述研究、その通時的研究、及び、地域差・集団差等の(非)言語行動の共時的変種の記述研究と、ディスコース・ポライトネス理論研究が有機的に協働していくことによって、「人間関係の日本語史の研究」にも新たな展開をもたらすことができると思われる。

3. 討論・総括

前半は会場から寄せられた質問票に各パネリストが答えつつ補足説明を行い、後半はそれらを踏まえてさらに議論を深めていった。

討論は、小林氏の提案する七つの発想法と、森山氏の提示した二つのケーススタディーをクロスさせたところに浮上する問題群を軸に、多様ななおかつ制約の多い過去の文献資料から有効な事例をどう拾い上げるか、過去と現在をつなぐ理論的枠組みをいかに構築していくかといった問題を併せ、活発な展開を見せた。ここでは紙幅の都合で登壇者

全員にほどよく絡んだ話題に絞って報告する。

小林氏の七つの発想法は、横並びではなく階層性があるのではという会場からの指摘に対して、同氏はそれを肯定し、まず言語化が前提としてあって、その上で定型化以下の六つがあるのだろうという見解を示した。ところで、森山氏が謝罪表現に関して指摘した、事情を縷々説明し、相手に対する説得が求められる社会から、「言い訳」を嫌い、定型的な謝罪表明が求められる社会へという変化は、コミュニケーションの活性度を指標とした小林氏の発展モデルに逆行しているようにも見え、一つの論点となった。小林氏は発想法の階層性を考慮しつつ、この場合は「定型化」が強く表れたものと見る。また、宇佐美氏は、森山氏の導入した「ディスコース・ポライトネスの基本状態」につき、個々のケースごとに考えていくもので、例えば西日本はネガティブ、東日本はポジティブといった固定的なものではないと説明する（東京でも山の手/下町の相違がある等）。理由の述べ方は状況次第であり、事の軽重によって基本状態・期待値も変わる。特に日本語の場合は常に両者が共起するといっても過言ではないとして、理論の柔軟性を強調した。言い訳を嫌う現代的感覚の醸成と社会構造の変化については会場からの指摘があり、諸星氏は、近世武家社会は封建社会で、主従関係が絶対的だったため、事情を縷々説明することは生じにくかっただろうとする。氏の紹介する興味深い文献の数々にも、事情を縷々説明するような記述はそう簡単には出て来ないだろうとの見通しも示された。企業の謝罪広告に見る説明責任のような考え方からすれば、まずは謝罪のアイコンを示したうえで、順序良く理由を説明するのが現代のストラテジーなのではないかという森山氏の指摘もあった。「詫び」という言葉自体の成立・展開に関する質問もあり、今後様々な角度からの検証・考察が期待されると言えよう。

依頼に関するケーススタディーに沿っても興味深い議論が展開されたが、割愛に従う。その他、地域差を人間の性向の差と見てよいかどうか、社会構造の背後に風土といった自然環境要因を考慮する余地があるかどうか、宮廷サロンの平安和文を当時の日本語として一般化できるかどうか、社会構造の変化をどの程度のスパンで捉えるべきか（文献以後の歴史時代でいいのか、原始社会から考えるべきか等）、言語的ストラテジーの変化を「発展」と捉えることが果たして妥当かどうか、等々、議論は尽きることがなかった。このシンポジウムを通じて、新たな分野の開拓にむけての様々な知見が得られたと言ってよいだろう。

（企画担当：大島資生，村田菜穂子，矢島正浩，高山倫明〈報告作成〉）